

族等と処理について考慮中である。

尚青木周弼が江戸から萩の研藏に出した手紙の中にも、金のことについて書かれたものがあり、経済的にも関心が強かったことが知られるのである。

(山口県萩市)

『医心方』所引の『延寿赤書』について

坂出祥伸

丹波康頼撰『医心方』には、中国の佚書が多く引用されているが、それらの中で、卷二十七・養生編その他に、「延寿赤書云」と記された引用文がある。馬継興によれば、全部で十三条とされている。^(一)しかし、演者の調べたところでは、次の十二条である。

- 卷四 治髮令堅方第三 一条
- 卷二十六 辟邪魅方第十三 一条
- 卷二十七 谷神第二 一条
- 卷二十七 養形第三 五条
- 卷二十七 服用第九 一条
- 卷二十七 雜禁第十一 一条
- 卷二十九 調食第一 二条

右の十二条のうち、巻四の引用文は巻二十七養形第三所に同文があり、また、巻二十六の引用文も、巻二十七養形所に同文があるから、『延寿赤書』からの引用は、正確には十条ということになる。

ところで、この『延寿赤書』を康頼が実際に見たのか、あるいは他の書から引用したのかは分らない。藤原佐世『日本国現在書目録』には著録されていない。ただし、『新唐書』芸文志子録道家類神仙家に、「裴煜延寿赤書一卷」と著録され、また、『宋史』芸文志子録道家類（神仙類）にも、「裴鉉延寿赤書一卷」と著録されているから、あるいは康頼の時代に日本に将来されていたのかも知れない。なお、その撰者名を唐志が「裴煜」としているのを、宋志は「裴鉉」に作っている。

私はかつて、「『医心方』養生篇の道教的性格^(二)」という論文の中で、この『延寿赤書』に言及し、佚書だと推定したことがある。私だけでなく、岡西為人博士『宋以前医籍攷』第二十六類養生でも佚書として扱われているし、また近年では前述の馬継興氏も佚書と見なしている。

ところが最近、私は『全唐文』（清・嘉慶十九年勅撰）

の中の巻三六三に、裴鉉作「進延寿赤書表」という一文を見出した。その小引には、「鉉は開元中、終南山に隱居す」とある。その抛るところの資料を詳らかにしえないが、前記の唐志で裴煜となっていた撰者名は、宋志の「裴鉉」に従っているし、また、彼は唐の玄宗の開元年間（七一三—七四一）の人物であることも知られた。ただし、裴鉉の伝は、兩唐書その他の伝記資料に全く見えないので、いかなる人物なのかは分らない。『延寿赤書』は、先の上表の文によって、玄宗に進呈されたもので、書名は正しくは、『上元高眞延寿赤書』と題され、巻軸に写されて、一軸八篇から成る「長生の道」を説いたものであることが分る。そこで、この書について更に調べたところ、『正統道蔵』洞神部方法類（台湾・芸文印書館縮印本第三十一冊）に、「上玄高眞延寿赤書」として収められ、前引の「進延寿赤書表」（唐・終南山林・臣・裴鉉上表）も併せ録されている。この書が凡べて八篇より成ることも、上表の記す通りである。

以上によって、『延寿赤書』は、佚書ではなくて、『正統道蔵』の中に道教經典として伝存していることが判明した

ので、従来の佚書という推定は訂正しなければならぬ。

次に、『医心方』所引の「延寿赤書云」の十二条（実は十条）を『道蔵』本の『延寿赤書』と比較対照してみると、卷二十七谷神第二の、「三魂名、爽靈・胎光・幽精。七魄神名、尸狗・伏矢・雀陰・吞賊・非毒・除穢・臭肺。五藏神名、心神・赤子・字朱靈、肺神・誥華・字虚成、肝神・龍煙・字含明、腎神・玄冥・字育嬰、脾神・常在・字魂庭」という引用文を除いて、他はまったく同文が伝存の『延寿赤書』に見出せる。

この書の内容は、前述のように「長生の道」を説いたものであるが、明・李杰『道蔵目錄詳註』卷三は、「日月を存想し、禁忌・起居・解除（穢れを除く意）・咒語等の法」を説いた書だと評している。以下に各篇名と簡単な内容を記す。

鬱隣前奔第一 日月の存想、身神の存想。

洗心内忌第二 言語・臥室・理髪等の禁忌。

清神外禁第三 邪鬼辟除の呪と啄齒。

藏密鉤神第四 閉目内視して耳目を聡明にする法、ある

いは守玄白の道（黑白黄三気の存想）。

宝神平気第五 耳目・顔面の按摩、頭髮を何度も櫛けず

ることによる老化防止。

注蔵永図第六 汚穢を解除する法と服薬禁忌など。

陰行真気第七 再び耳目の按摩。

対時習真第八 再び存想。また、道德経と黄庭内景経の

誦誦による長生。

以上の内容は、すべてが他の文献からの引用から成っていて、「真誥曰」という形式が特に目立っている。これは、梁・陶弘景（四五六～五三六）の『真誥』（現行本二十卷。『道蔵』太玄部所収。芸文図書館縮印本第三十四冊）を指す

のであるが、なお仔細に検討してみると、「真誥曰」とはなくて、例えば「東郷司令曰」「青牛道士口訣曰」のような他の形式の引用文も、そのほとんどが現行本の『真誥』卷九、卷十に見出せる。^(三)この両巻は存想・按摩・禁忌等の

具体的方法を説いた部分であり、道教上清派の重要な修行法である。とすれば、『延寿赤書』の撰者・裴鉉は、上清派の流れを汲む道士であったのだろうか。

ただ、問題になるのは、「靈宝五符序曰」一条、「老君養神経曰」三条、「保命君曰」一条が、現行本『真誥』に見

出せない点である。『真誥』原七巻本には存していたものが二十巻に編成されるに際して何かの理由に脱落したのか、あるいは、伝写の間に脱落したのか、またあるいは、『延寿赤書』撰者が独自の見解にもとづいて右の五条を採り入れたのか、今のところ判然としない。特に問題になるのは「靈宝五符序曰」にあげられている合計二十八の身神名であり、これは上清派の崇ぶ經典『黃庭經』に見える身神名とは全く異なっている点である。上清派の身神名は、前述『医心方』巻二十七谷神第二所引の「延寿赤書云」に見えている五蔵神名の方である。こうしたことが、どういう意味をもっているかについては、今後の考察にゆだねたい。

(一) 医心方一千年記念会刊『撰進一千年記念・医心方』(昭和六一年刊)所収の馬継興『『医心方』中的古医学文献初探』。

(二) 秋月観瑛編『道教と宗教文化』(平河出版社、一九八七年)所収。

(三) 『延寿赤書』が、ほとんど『真誥』巻九・十からの引用文から成っていることについては、すでに石井昌子『真誥』と『上玄高真延寿赤書』(『東洋学術研究』第十五巻第二号、昭和五一年)で詳細に検討されている。同氏

からの御賜教に謝意を表す。

(四) 『猶龍伝』巻五で張陵撰とされる『太上靈宝五符序』については、陳国符が『道蔵源流攷』六四・六六頁で、現行本(『道蔵』洞玄部神符類。芸文印書館縮印本第十冊)が「古五符經」にはほ同じことを論じ、石井昌子「靈宝五符經の一考察」(『創価大学一般教育部論集』第五号、一九八〇年)、同「太上靈宝五符序の一考察」(『牧尾良悔博士頌寿記念論集・中国の宗教・思想と科学』国書刊行会、昭和五九年)の陳氏説を支持している。しかし、『延寿赤書』所引の「靈宝五符序曰」の文は現行本『太上靈宝五符序』巻上の中に、いくらか似た文があるものの、大いに変改されているので、陳氏の説には疑いもたれる。なお、この經典の研究には、他にM・カルタンマルク(川勝義雄訳)『太上靈宝五符序』に関する若干の考察(『東方学』第六五輯、昭和五八年一月)がある。

(関西大学文学部)